



大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭における前庭と敷地配置の空間構成-内と外をつなぐ空間の研究

山口, 秀文

(Citation)

日本建築学会計画系論文集, 75(654):1907-1916

(Issue Date)

2010-08

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001623>



大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭における前庭と敷地配置の空間構成 －内と外をつなぐ空間の研究－

SPATIAL STRUCTURE OF THE FRONT GARDEN AND SITE ARRANGEMENT IN HONBOU AND TACCHU OF DAITOKUJI TEMPLE AND MYOSHINJI TEMPLE － Study on the space connecting the interior and exterior －

山口 秀文*
Hidefumi YAMAGUCHI

This paper's aim is a clarification of spatial composition of site arrangements with a viewpoint of relationship between gardens and buildings. I pick up Daitokuji temple and Myoshinji temple. Through a typological analysis, I point out some results as follows; 1) There are six types of site arrangement on "Honbou" and "Tacchu". 2) Board fences and buildings of "Kyakuden" and "Kuri" compose front gardens. 3) Every site arrangement of "Honbou" and "Tacchu" consist of six elements. 4) Spatial arrangements of gardens make adjustments and correlation between the intrinsic factor and extrinsic one.

Keywords: Spatial Structure, Site Arrangement, Front Garden, Daitokuji Temple, Myoshinji Temple

空間構成, 敷地配置, 前庭, 大徳寺, 妙心寺

1. 研究の背景と目的

本研究は、「敷地」を建築の内部空間と外部空間との関係からみたデザイン・計画に関する基礎的研究である。本稿では、敷地内の外部空間を単なる空地とは捉えずに、「庭」という人々の生活に関連し文化的意味をもつ概念としてとらえる。

一方、一つ一つの敷地における建築と庭の関係は、敷地内だけに関係するのではなく、敷地の外、すなわち、街や都市とも大きく関係している。この「敷地」と都市やまちとの関係について、今は村から町、郊外住宅地への変遷を地割りと家との関係から述べ、町や村の変化をその集合のあり方とそれに応じた敷地の中の家屋の配置から説明している¹⁾。重村はこのような単位と集合の関係、都市と建築とのあり方について「プロトコル」という概念（「単位に内在する上位と接続する形式＝規定」）を用い、幕末の江戸や日本の町家、パリの中庭を囲む建築群（アパルトマン）を例に、「プロトコルが町並みをつくり出し」ていたことを示している²⁾³⁾。また、山田は、陣内とリンチを引用・参照^{注1)}し、『敷地』という空間単位を基本的な研究の枠組みとして設定し、景観について論じている^{注1)}。

これらに示される単位としての「敷地」について、リンチが「敷地計画とは、建築やその他の構築物を互いに調和するように配置する技法である。」⁵⁾と述べているように、敷地内の建築・庭の配置のあり方が都市やまちと建築を結びつけ、「互いに調和」させるのである。

このように、敷地という空間単位、敷地内の建築の配置の重要性、

それらがある秩序をもつことにより調和が生まれることが指摘されている。

次に、本稿での庭、建築と庭、敷地についての捉え方を改めて述べる。

建築、庭、敷地の関係を、庭を中心に4つの方向から捉え、図1に示す。「(1) 間取り（建築）と庭の関係」とは、建築の間取り、内部の空間と庭との関係である。「(2) 庭そのもの」とは、敷地内で展開する庭そのものの空間や機能・意味である。「(3) 庭と敷地外の関係」とは、敷地外、すなわち隣地や街路、地区との関係をいう。「(4) 敷地内の建築と庭の配置」とは、上記3点を総合した上での敷地内部での建築と庭の関係や配置を扱う視点である。

また、建築と敷地という点からこれら三者の関係をみると、建築

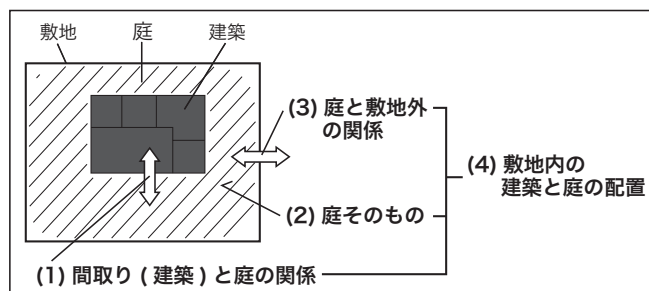


図1 建築・庭・敷地に対する4つの視点

* 神戸大学大学院工学研究科 助手・博士(工学)

Research Assoc., Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.

そのもの機能や役割等に基づく平面や配置といった内的要因と、敷地がもつ都市的な制約条件としての敷地規模や形状、接道等のアプローチといった外的要因を空間的に関係づけ取りまとめているものが敷地内部の庭のデザインであると考ええる。

以上より、敷地内の建築と庭のあり方に関する一つの基礎的研究として、大徳寺・妙心寺の空間を取り上げ（選定理由は後述）、建築・庭・敷地に着目し、外的要因と内的要因との関係からその前庭と敷地配置の空間構成を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

2-1. 研究の位置づけ

大徳寺・妙心寺は、伝統的な日本建築・庭園を有し、文化財としての意味からも日本建築史・庭園史において膨大な研究がなされている^{注2)}。一方、建築・都市デザインの分野においても研究されている。都市デザイン研究体による大徳寺・妙心寺を多くの塔頭が集合した一つの都市空間と見立てた都市空間・都市デザインの研究¹⁸⁾、川崎清らによるシークンス分析を通した寺院のアプローチ空間（前庭）の研究¹⁹⁾がある。これらには建築と庭からなる「敷地」という単位とその内部の構成という視点はなく、この点が本研究と異なる点であり、意義ある点である。

また、西澤文隆による建築と庭の関係に関する一連の研究^{注3)}もある。これは、「実測」を通して建築と庭の有り様を「敷地」単位、時には周辺環境も含めたものとして記述し解き明かしている。本研究では、その「実測図」を分析のベースにしている。本研究は、その建築と庭の有り様を「実測図」という生の情報をもとに、大徳寺・妙心寺の44の本坊塔頭を対象にその空間とその構成を、建築と庭に着目し外的要因と内的要因からモデル的な図化を通して明らかにする点で意義がある。

2-2. 研究対象事例の選定と概要

上述の既往研究にも述べられているように大徳寺・妙心寺の空間は、塔頭群の集合体としての都市空間、建築と庭の高密な関係、一定の規律の中にある多様性、前庭のもつ多様性と都市空間、住み続けられていく中で造られた空間（住空間の集合体）という特徴を有していると捉える。

禅宗寺院の塔頭は、宗教空間でもあるが居住空間^{注5)}としての性格ももち、良好な建築と庭の関係、まち並みを構成する上で重要な役割を果たすと考えられる前庭が発達している。各塔頭では、一度に多くの建物と庭が創られたのではなく、主な建築である客殿と庫裏が建てられ、庭が造られて、その後、徐々に必要に応じて建築と庭が造られていった^{注6)}。さらに、代々住む和尚や庭師などの多くの知識人や名人によって担われたのである^{注6)}。このような特徴を有する禅宗寺院として大徳寺・妙心寺を取り上げる（図2）。

2-3. 研究の方法

研究の方法は以下である。

- (1) 上記のような特徴をもつ大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭の配置形式を内的要因である客殿・庫裏の配置と外的要因であるアプローチから典型的に整理し、その特徴を明らかにするとともに典型例を抽出する。
- (2) 配置形式と外的要因である敷地規模・形状との関係から整理し、(1)と合わせて、配置形式と外的要因との関係を明らかにする。
- (3) 典型事例について、西澤文隆・重森三玲の実測図^{注9)}と観察調査により建築と庭、つまり、内的要因と外的要因との関係から前庭の空間構成、及び、本坊・塔頭^{注5)}の建築と庭の配置構成を方丈・客殿、庫裏、書院、前庭を中心に明らかにする。



図2 大徳寺・妙心寺の概要

表2 本坊塔頭の配置形式一覧

配置形式		No.	塔頭名	アプローチ	表門位置	敷地面積	Lew	Lsn	備考
特殊型		1	大徳寺 大徳寺本坊	南	庫裏手前	3002	85.20	37.69	本坊
		2	妙心寺 妙心寺本坊	南		5945	89.96	77.70	本坊
		3	妙心寺 大心院	西		2187	63.16	41.67	
Ⅰ 平行型		4	大徳寺 龍源院	東	庫裏手前	1589	49.92	40.20	
		5	大徳寺 大光院	東	庫裏手前	2776	98.32	61.34	
		6	大徳寺 養徳院	西	庫裏正面	2505	47.66	65.78	
		7	妙心寺 退蔵院	東	庫裏正面	4725	81.07	72.39	
		8	大徳寺 黄梅院	東	庫裏正面	5732	78.32	92.44	
		9	大徳寺 大慈院	東	庫裏後	1102	39.50	33.03	袋小路
Ⅱ 平行型		10	大徳寺 聚光院	南	庫裏手前	2189	45.58	54.81	
		11	大徳寺 芳春院	南	庫裏手前	5787	126.78	61.83	袋小路
		12	妙心寺 玉鳳院	南	庫裏正面	2056	73.85	35.92	
		13	妙心寺 東林院	南	庫裏正面	2111	33.60	80.68	
		14	妙心寺 寿聖院	南	客殿庫裏間	1405	31.34	51.55	
		15	大徳寺 大仙院	南	客殿庫裏間	2394	54.78	56.68	袋小路
		16	妙心寺 大龍院	南	客殿庫裏間	2514	51.82	50.82	
		17	大徳寺 三玄院	東	客殿庫裏間	3651	51.07	124.52	90度回転
		18	大徳寺 総見院	南	客殿庫裏間	4752	74.26	74.66	
Ⅱ 直交型		19	大徳寺 興臨院	東	庫裏手前	1170	42.34	29.22	
		20	妙心寺 金牛院	東	庫裏手前	1374	29.33	54.58	
		21	大徳寺 如意庵	東	庫裏手前	2055	65.52	52.24	
		22	妙心寺 天球院	東	庫裏手前	2618	71.35	58.68	
		23	妙心寺 天授院	東	庫裏手前	2845	94.47	43.72	
		24	妙心寺 麟祥院	西	庫裏手前	3077	90.38	43.27	
		25	大徳寺 真珠庵	西	庫裏手前	3599	54.40	75.51	袋小路
		26	大徳寺 龍翔寺	南	庫裏手前	9833	103.98	115.54	90度回転
		27	大徳寺 瑞峰院	東	庫裏正面	1304	43.02	30.91	
Ⅲ 平行型		28	大徳寺 徳禅寺	西	庫裏手前	1406	34.55	57.48	
		29	妙心寺 桂春院	西	庫裏正面	2067	46.36	53.14	
		30	妙心寺 衡梅院	東	庫裏正面	2178	47.33	56.36	
		31	妙心寺 養源院	西	庫裏正面	2256	57.67	61.50	
		32	妙心寺 東海庵	東	客殿庫裏間	1591	35.29	48.59	
		33	妙心寺 龍泉庵	西	客殿庫裏間	2445	46.21	64.75	
		34	妙心寺 雑華院	西	客殿庫裏間	2538	62.11	70.79	
		35	妙心寺 霊雲院	東	客殿庫裏間	2985	55.40	65.57	
		36	妙心寺 春光院	東	客殿庫裏間	3047	40.13	82.36	
		37	妙心寺 隣華院	西	客殿庫裏間	3490	71.02	61.85	
		38	大徳寺 高桐院	東	客殿正面	7582	121.20	86.30	
		39	妙心寺 聖沢院	東	客殿正面	2401	60.76	49.61	
		40	妙心寺 慈雲院	東	客殿正面	2429	77.43	37.92	
Ⅲ 直交型		41	妙心寺 大雄院	北	庫裏手前	4451	58.60	80.92	
		42	大徳寺 孤蓬庵	北	庫裏手前	6334	104.98	70.59	
		43	妙心寺 徳雲院	南	客殿手前	2040	56.85	42.46	南北二つのアプローチ
		44	妙心寺 蟠桃院	南	客殿手前	3024	55.57	75.45	
					全体平均	3104	63.69	60.98	
※アプローチとは、表門からのアプローチの方向を方位で表す。表門位置は図5参照。敷地面積の単位は㎡。Lewは東西方向の敷地幅（単位 m）。Lsnは南北方向の敷地幅（単位 m）。Ⅲ直交型の徳雲院、蟠桃院は南を主としつつも南北二つのアプローチをもつ。									

※アプローチとは、表門からのアプローチの方向を方位で表す。表門位置は図5参照。敷地面積の単位は㎡。Lewは東西方向の敷地幅（単位m）。Lsnは南北方向の敷地幅（単位m）。III直交型の徳雲院、蟠桃院は南を主としつつも南北二つのアプローチをもつ。

	庫裏手前	庫裏正面	客殿庫裏間	客殿正面	客殿手前	庫裏後
I 平行型	龍源院 大光院	養徳院 (大) 黄梅院 退蔵院				大慈院
II 平行型	聚光院 芳春院	玉鳳院	大仙院 三玄院 総見院 寿聖院 大龍院			
II 直交型	真珠庵 如意庵 興臨院 龍翔寺	天球院 天授院 麟祥院 金牛院	瑞峰院			
III 平行型	徳禅寺	養源院 衡梅院 桂春院	龍泉庵 (妙) 東海庵 霊雲院	春光院 隣華院 雑華院	高桐院 聖沢院 慈雲院	
III 直交型	孤蓬庵 大雄院				徳雲院 蟠桃院	

図5 本坊・塔頭配置形式図（明朝：大徳寺、ゴシック：妙心寺）

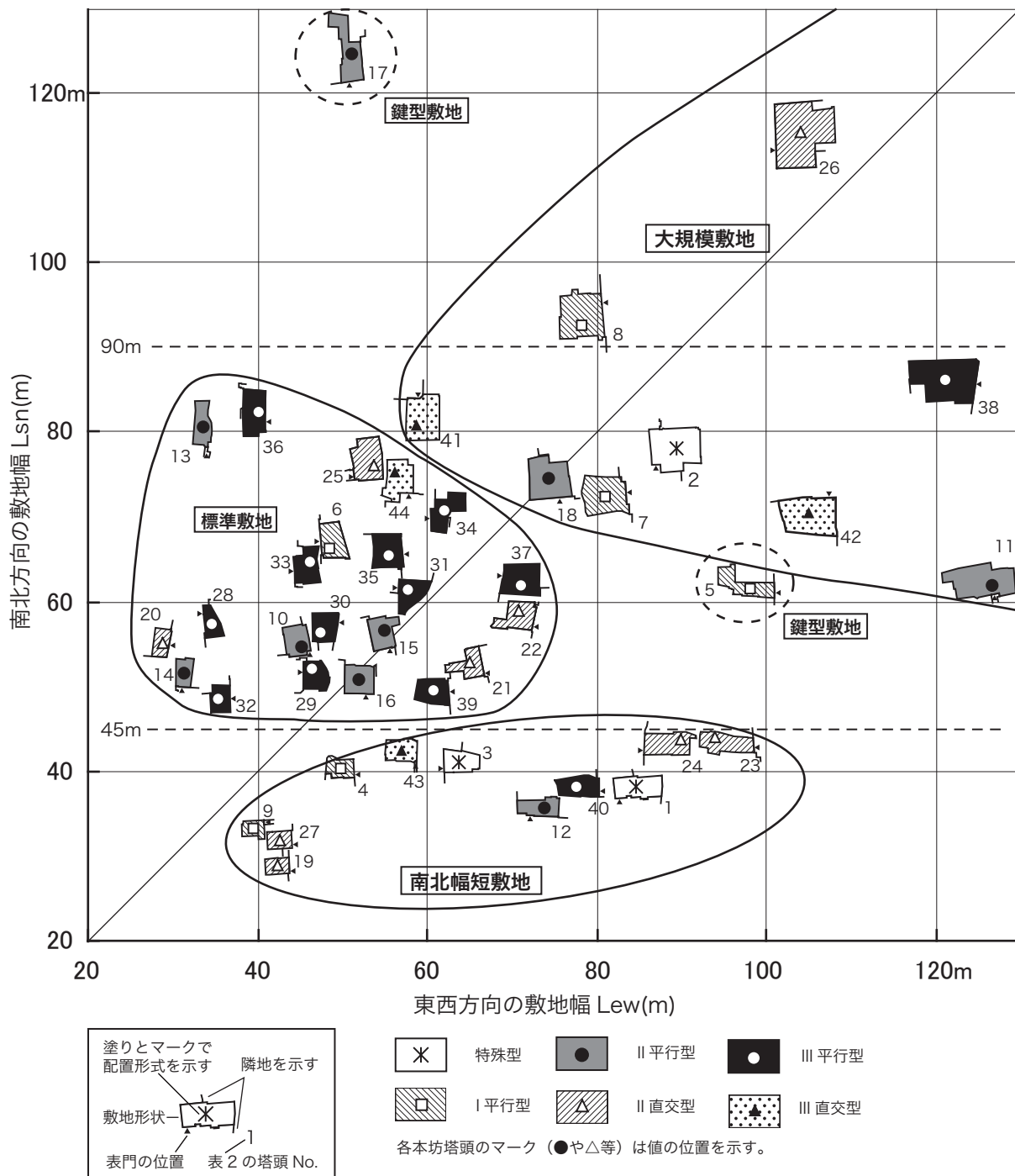


図6 本坊・塔頭の敷地規模・形状と配置形式との関係(散布図)

No. は表2 によっている。

4-1. 敷地規模

まず、敷地規模をその面積より分析する。図7 は本坊・塔頭の敷地面積をその大きさの順に並べたものである。図中に示す様に小規模敷地 ($S < 2000\text{m}^2$) が8、中規模敷地 ($2000\text{m}^2 \leq S < 4000\text{m}^2$) が27、大規模敷地 ($4000\text{m}^2 \leq S$) が9 となった。特に、図6 に示す様に 4000m^2 を境にその分布が分かれる。

4-2. 東西方向の敷地幅 Lew と南北方向の敷地幅 Lsn の値

図6 の分散状況から、Lew はほぼ連続的に分散し、Lsn は 45m 、 90m 付近で区分できる。特に、 45m 以下の敷地を南北幅短敷地とする。

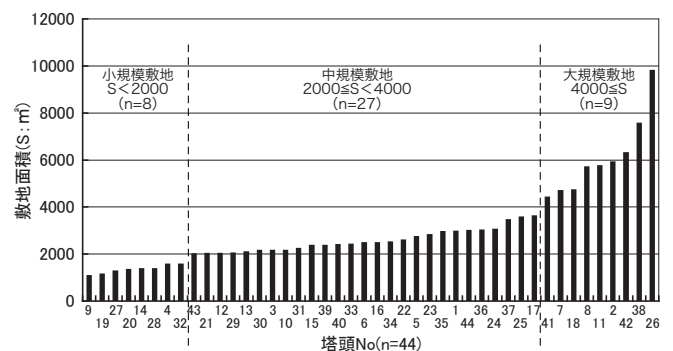


図7 本坊・塔頭の敷地面積

4-3. その他の敷地

No5 大光院と No17 三玄院は敷地形状が鍵型になっており、図 6 にも示されるように特異な敷地形状である。これを特に鍵型敷地とする。

4-4. 敷地規模・形状と配置形式の関係

これら敷地規模・形状の分析から、図 6 に示す「南北幅短敷地」「標準敷地」「大規模敷地」「鍵型敷地」の 4 つの特徴のある敷地群に分けられる。それらと配置形式との関係を表 3 に示し、以下にその関係についての考察を述べる。

「南北幅短敷地」：敷地面積 4000㎡未満、敷地の南北幅が 45m 以下の敷地であり、東西に細長い敷地が多い。配置形式との関係では、I 平行型、II 直交型のように、アプローチ方向が東西となる配置形式が多くを占める。

「標準型敷地」：敷地面積 4000㎡未満、南北方向の敷地幅（Lsn）が 45 ～ 90m、東西方向の敷地幅（Lew）が 72m 未満の範囲の敷地である。もっとも多くの本坊・塔頭が該当し（22/44）、標準的な敷地であるといえる。配置形式との関係は、II 平行型、II 直交型、III 平行型が多く該当している。

「大規模敷地」：敷地面積 4000㎡以上の敷地で、配置形式との関係はみられない。これは、敷地規模が大きいため敷地規模や形状よりもアプローチやその塔頭におけるその他の内的要因によって配置形式が決められていると考えられる。

「鍵型敷地」：敷地奥に向かって鍵型の特殊な敷地形状をしているものである。該当数が少なく（三玄院と大光院のみ）、配置形式との関係は分析できない。

4-5. 本坊・塔頭の配置形式に影響を与える要因

前章の特殊型の特徴とアプローチの位置と配置形式の関係を合わせて、配置形式に影響を与える要因を整理し、表 4 に示す。

表 3 敷地群と配置形式の関係

	特殊型	I 平行型	II 平行型	II 直交型	III 平行型	III 直交型	合計
南北幅短敷地	2	2	1	4	1	1	11
標準型敷地	0	1	5	4	11	1	22
大規模敷地	1	2	2	1	1	2	9
鍵型敷地	0	1	1	0	0	0	2
合計	3	6	9	9	13	4	44

表 4 配置形式に影響を与える要因

配置形式	影響を与える要因
特殊型	本坊という内的要因
I 平行型	東西アプローチ。特に顕著な関係はみられないが、比較的正方形に近い敷地でみられる。
II 平行型	南アプローチ。標準型敷地によくみられる。
II 直交型	東西アプローチ。様々な外的要因(敷地規模・形状)に対応する配置形式
III 平行型	東西アプローチ。標準型敷地によく見られる。
III 直交型	北側アプローチ。敷地規模・形状よりもアプローチの制約が大きい。

5. 前庭の空間構成

前章では、配置形式と外的要因との関係について、特にアプローチとの関係が大きく関係していることが分かった。そこで本章では、両者をより深く探るため、前庭の空間構成を明らかにする。

5-1. 前庭形態と配置形式

各配置形式と前庭形態との関係について述べる（図 8）。

前庭の形態はその平面形より「表門からのアプローチの向きに対

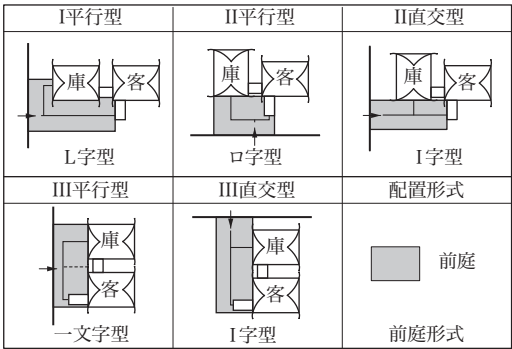


図 8 配置形式と前庭形態

表 5 分析対象本坊・塔頭一覧

配置形式の種類	対象本坊・塔頭
I 平行型	龍源院 **、黄梅院 **、退蔵院 *
II 平行型	大仙院 *、芳春院 *
II 直交型	真珠庵 *
III 平行型	東海庵 *、雲雲院 ***、春光院 ***
III 直交型	孤蓬庵 *

* 分析で用いた 1/200 平面図は以下の図面を元に観察調査等によって位置図修正し、トレースして作成した。
* 西沢文隆実測図¹⁴⁾¹⁵⁾ ** 実測図日本の名園¹⁷⁾
*** 西沢文隆小論集 2 庭園論 II 日本文化の中¹¹⁾

して奥行きがあるものを I 字型」「同じく門からのアプローチの向きに対して横幅があるものを一文字型」「前庭の平面形がほぼ正方形であるものをロ字型」「前庭の平面形が L 字型であるものを L 字型」として 4 種類に分けられる。

この分類と配置形式の対応関係は「I 平行型は L 字型に」「II 平行型はロ字型に」「II 直交型、III 直交型は I 字型に」「III 平行型は一文字型に」となる。

5-2. 前庭の空間構成の分析

本坊塔頭の 6 類型から、前庭との関係が明らかな 10 塔頭を対象（表 5）にその前庭の空間構成をを明らかにする。

これらの 10 の本坊・塔頭について 1/200 の平面図より、客殿と庫裏の配置構成との関係、建築や塀による囲まれ方から分析を行う。

前庭は「塀で空間を仕切る」ことで囲われた外部空間となっている。前庭を囲っている空間を仕切る塀には、図 9 のように「(1)方丈・客殿と前庭を仕切る」「(2)中庭、茶堂・客寮と前庭を仕切る」「(3)サービスヤードと前庭を仕切る」の三つの働きがある。そして、その三つの塀は図 10 のように外部空間、建築（庫裏）の内部空間、建築間へ延長され、それらを縫うように敷地全体を仕切っている。この仕切りを図 10 中の凡例のように①②③と名付ける。

この①②③の塀による働きを模式図に表した（図 11）。その①②③は前庭を形作る際に庫裏、玄関という建築に接続される。その接続のされ方に着目し、「玄関の空間」、「庫裏の空間」として図化した（図 11）。これをもとに前庭の空間構成について以下の様に考察した。

前庭の空間は(1)(2)(3)の塀、①②③の仕切りによって、表門では①と③の仕切る働きがここで凝縮されて、敷地の内外を仕切る結果、中庭は方丈・客殿と庫裏に挟まれて聖と俗を仕切る結果となっている。図 12 のように表門を「凝縮された結果」、対して中庭を「弛められた結果」、前庭は敷地の内外を結果する「厚みのある結果」と名付け、これを「結果の二重構造」という。

(1)(2)(3)の塀が建築（玄関、庫裏、表門）のどこに接続されて空間

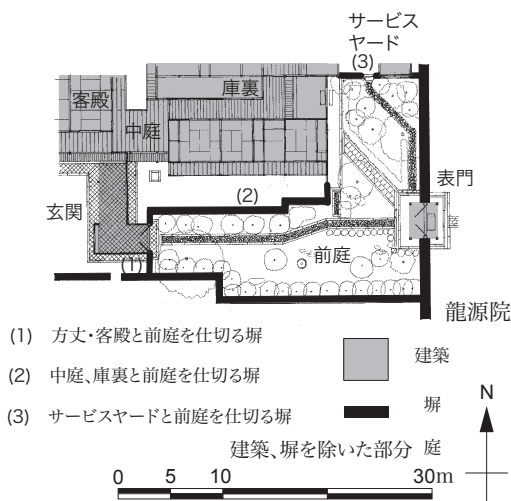


図9 空間を仕切る塀の分析図（龍源院）

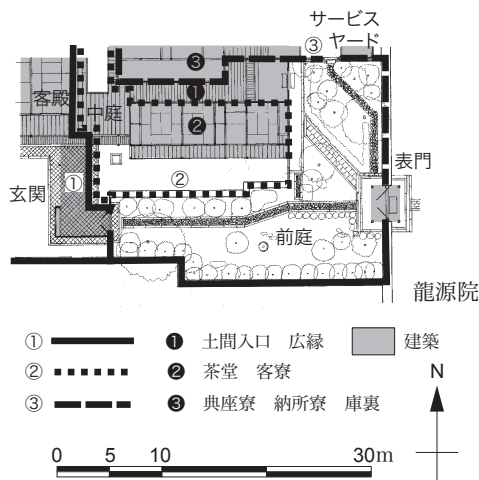


図10 空間を仕切りの動き（龍源院）

を仕切っているかについて説明していく。

「表門」は(1)(2)(3)の塀が直接接続されないが、その延長である①と③の仕切りが左右に接続されている。

「玄関」は(1)(2)の塀が接続され、その接続のされ方で「出ている」玄関、「引いている」玄関、中間的な玄関と三つに分類される。この塀の接続のされ方によって玄関の見え方が異なり、塀の接続のされ方は玄関をプレゼンテーションする手法であると言える。その手法は「玄関を出す 出たプレゼンテーション」「玄関を引く 引いたプレゼンテーション」「両者を使う 中間のプレゼンテーション」の三つとなる。

「庫裏」は(2)(3)の塀が接続され、玄関と同じようにその接続のされ方によって庫裏の見え方が異なり、塀の接続のされ方は庫裏をプレゼンテーションする手法であると言える。その手法は「庫裏の出隅をつくる 出たプレゼンテーション」、「庫裏のファサードを切る 引いたプレゼンテーション」、「庫裏のファサードを奥まらせる 引いたプレゼンテーション」、「庫裏のファサードを全面見せる 中間のプレゼンテーション」がある。

塀の仕切りと結界、プレゼンテーションの手法との関係、玄関のプレゼンテーションの手法と庫裏のプレゼンテーションの手法の組み合わせを考えて、それぞれの前庭がどのように囲われて、その形

配置形式 前庭形態	塀の働き模式図	玄関の空間	庫裏の空間
I 平行型 L字型 龍源院 黄梅院 退蔵院			
II 平行型 口字型 大仙院 聚光院 芳春院			
II 直交型 I字型 真珠庵			
III 平行型 一文字型 東海庵 靈雲院 春光院			
III 直交型 I字型 孤篷庵			

図11 塀の働き模式図

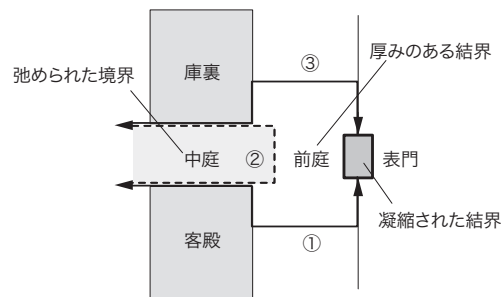


図12 結界の二重構造

態が形づくられているかを各配置形式の類型毎にその特徴を述べていく。

I 平行型の龍源院、黄梅院、退蔵院は前庭の形態がL字型、玄関のプレゼンテーションが引いたものであるのに対して、庫裏のプレゼンテーションは出たものになっている。

II 直交型と III 直交型の真珠庵と孤篷庵は前庭の形態がI字型、玄関のプレゼンテーションが出たものであるのに対して、庫裏のプレゼンテーションは引いたものになっている。

II 平行型の聚光院、芳春院は前庭の形態が口字型、玄関のプレゼンテーションは中間のプレゼンテーションであり、庫裏のプレゼンテーションは引いたものになっている。

III 平行型の衡梅院、東海庵、靈雲院、春光院は前庭の形態が一

文字型、玄関のプレゼンテーションが出たものであるのに対して、庫裏のプレゼンテーションは中間のものになっている。

このように前庭は大きくは建築で囲まれているが、最終的にその平面を整えているのは外部空間を仕切る塀であり、その塀の働き、建築との関わりによって「結界の場としての前庭」「プレゼンテーションの場としての前庭」となるのである。

これは、外的要因であるアプローチ、敷地規模・規模、内的要因である建築（平面や配置形式）という二つの要因を前庭が空間的に関係づけとりまとめていると考えられる。

6. 本坊・塔頭の配置構成

本章では6類型それぞれの代表的な本坊・塔頭について、その配置平面図をもとに、その配置構成を明らかにする。対象は、「特殊型」の大徳寺本坊、「I 平行型」の龍源院、「II 平行型」の大仙院、「II 直交型」の真珠庵、「III 平行型」の霊雲院、「III 直交型」の孤蓬庵である。

分析対象となる配置平面図は、重森三玲、西澤文隆によって作成された実測図を使用している^{注10)}。

分析方法は以下である。

① 1/500 の配置平面図上で、「仕切り」によって、建築と庭もしくは庭のみでなる各構成要素の範囲を区切った図を作成する（図13）。

② その図を用い、各構成要素、「仕切り」、配置構成の3点について分析考察を行う。

6-1. 「仕切り」による構成要素

前章前庭の空間構成で述べた様に、建築の外壁や内壁、襖や板戸等の建具、塀や生垣によって、建築の内外によらず連続した線がつくられ、空間を仕切っている。この「仕切り」により、対象本坊・

塔頭の 1/500 配置平面図を読み取り、分析方法①に示す図を作成した（図13）。この結果、「客殿」「庫裏」「中庭」「書院」「前庭」「墓地・菜園・樹林」の6つの各要素により本坊・塔頭が構成されていることが分かった。

6-2. 各構成要素の特徴

建築と庭の関係に着目し、6つの構成要素「客殿」「庫裏」「中庭」「書院」「前庭」「墓地・菜園・樹林」それぞれの特徴について分析考察する。

①客殿：庫裏、中庭と書院との関係により、主に三方向の庭をもつ。南庭と東西北のうち2つの庭である。それぞれ連続感をもちつつ、板戸や縁石、樹木などにより完全ではなく区切られている。建築と庭が建築と塀による一つの連続するまとまりをもった空間となっている（庭が連続して展開する）。

②庫裏：庫裏の一部（典座寮、納所寮、庫裏（狹義））と蔵などの諸建築、それらを繋ぐ縁や渡り廊下、その間の庭からなる。庭とそれを取り囲む諸建築によるまとまりである。

③中庭：客殿と庫裏の間に位置し、渡り廊下、縁、庭と庫裏の一部（茶堂、客寮）からなる。渡り廊下と縁で庭を囲む、臨むまとまりである。

④書院：建築とその塀や生垣で囲まれた庭や客殿や庫裏と共有する庭からなる。客殿と庫裏の間の位置にある。建築と連続する庭からなるまとまりである。

⑤前庭：庫裏、客殿（玄関）、中庭と敷地境界の塀により囲まれた庭である。

⑥墓地・菜園・樹林：客殿、庫裏、書院、前庭の外側、敷地境界に沿って位置するオープンスペースによる庭である。

6-3. 6つのまとまりによる配置構成の特徴

6類型を代表する6つの本坊塔頭について、6つのまとまりによる配置構成についてその特徴を記していく。

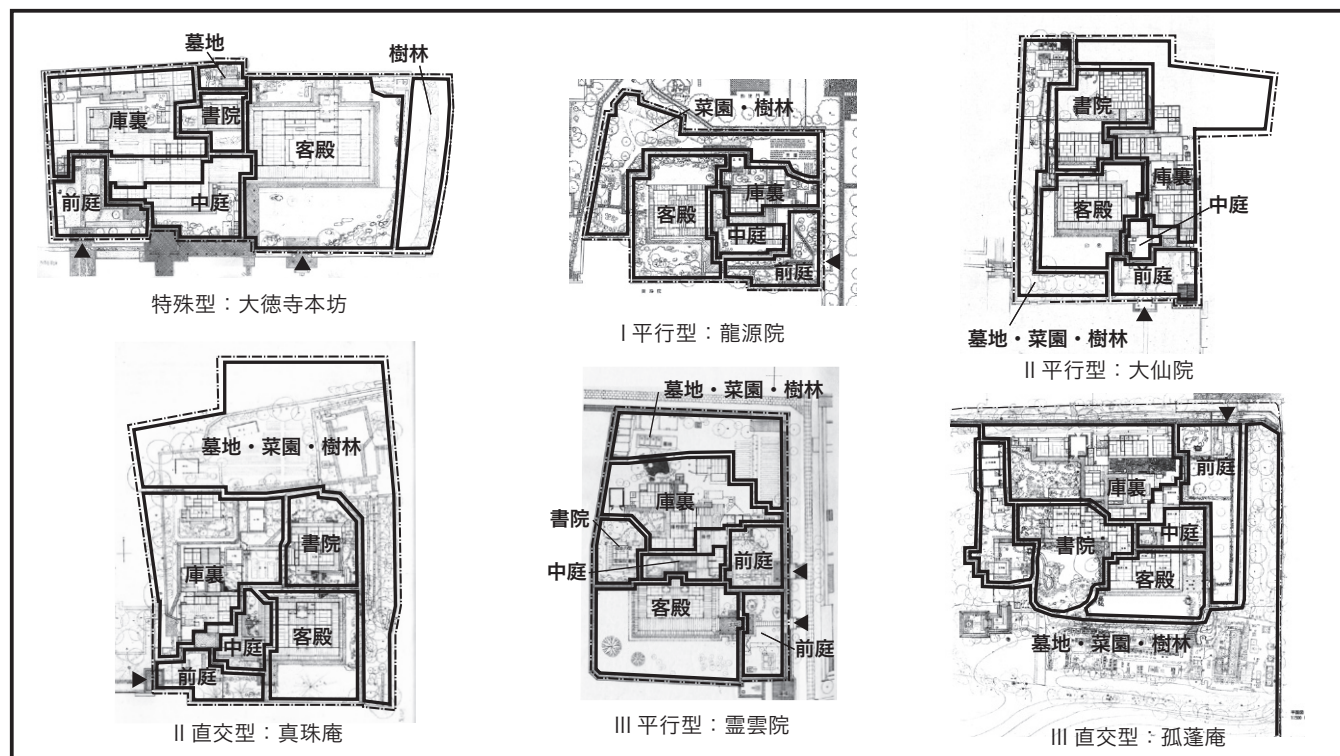
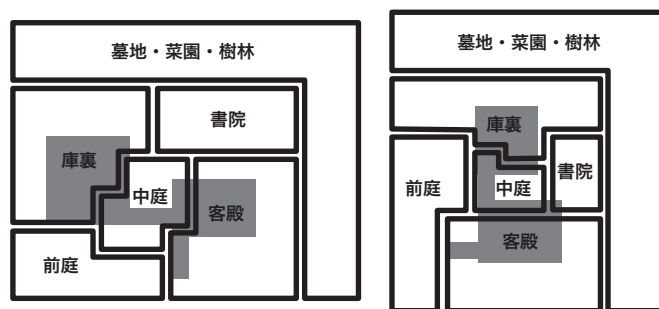


図13 本坊・塔頭の配置構成

- ・大徳寺本坊（特殊型）：東西に客殿と庫裏のまとまりが並び、その間に中庭と書院が位置し、その外側西に前庭、東に樹林がある。本坊であるため、玄関が直接伽藍に開いているため、他の塔頭とはことなり、前庭は庫裏と中庭と塀に囲まれた庭となっている。
- ・龍源院（I 平行型）：書院はなく、客殿、庫裏、中庭、前庭、再建・樹林の5つのまとまりから成っている。東西に客殿と庫裏が並び、中庭が間に位置する。前庭は客殿、庫裏、中庭に接して位置している。敷地北から西にかけて菜園・樹林・墓地が巡っている。
- ・大仙院（II 平行型）：東西に客殿・庫裏が並び、間に中庭が位置する。客殿の四周に庭があり、客殿北庭は書院と共有している。前庭は客殿、庫裏、中庭に接して位置している。敷地南から西にかけて墓地・樹林が囲っている。
- ・真珠庵（II 直交型）：東西に客殿と庫裏が並び、中庭がその間に位置する。書院は客殿北側に、前庭は客殿、庫裏、中庭に接している。これらの外側の東から北側にかけて墓地・菜園・樹林が取り囲んでいる。
- ・靈雲院（III 平行型）：南北に客殿と庫裏が並び、その間に中庭が位置する。書院は敷地西側、客殿、庫裏、中庭に面し、反対の東側に前庭が位置する。敷地北から北東に墓地・菜園が位置する。
- ・孤蓬庵（III 直交型）：南北に客殿と庫裏が並び、その間に中庭が位置する。中庭の東に前庭、西に書院が位置する。東、南、西の三方向を墓地・樹林が取り囲む。

これらをまとめると、図14のように二つの配置構成があることがわかる。それは客殿と庫裏が東西に並ぶタイプと南北に並ぶタイプである。東西に並ぶものは、特殊型（大徳寺本坊）、I 平行型（龍源院）、II 平行型（大仙院）、II 直交型（真珠庵）の4類型、南北に並ぶものは、III 平行型（靈雲院）、III 直交型（孤蓬庵）の2類型である。



東西配置の配置構成モデル図

南北配置の配置構成モデル図

図14 本坊・塔頭の配置構成モデル図

また、以下の点で全類型を通じて共通していることが分かった。

①中庭を中心に各構成要素が配されている

中庭を中心に客殿、前庭、庫裏、書院がその順で周囲を取り囲み、本坊・塔頭の主要な建築と庭の群を形成していることである。その外側に、墓地・菜園・樹林というオープンスペースのみの庭が取り囲む。

②外側にある墓地・菜園・樹林

墓地・菜園・樹林は、他の本坊塔頭との隣地境界ではなく、境内内の街路もしくは境内外側との敷地境界側にある。

③塀、壁、建具、生垣による「仕切り」によって、建築と庭による

まとまりのある構成要素がかたちづくられている。

④トポロジカルな配置構成

客殿と庫裏を中心に各建築が配置され、それに伴う庭により敷地内の配置が構成されている。客殿は四周に庭をまとい、塀や生垣によって、庫裏は周囲に建築が配置され、その間の庭によってまとまりがつくられている。これは、建築と庭による各空間をトポロジカルに配置するものである。

このように、本坊・塔頭の配置構成は、敷地がもつ敷地規模や形状、接道等のアプローチといったそれぞれに異なる外的要因をもちながらも、建築そのものの機能や役割等に基づく平面や配置といった内的要因を満たす同質のトポロジカルな配置構成となっていると考えられる。

7. まとめ

以上より、得られた知見をまとめる。

(1) 前庭は客殿と庫裏、表門及び塀により囲まれ、本坊・塔頭の配置形式に応じた形となっている。前庭と街路・客殿の四周の庭・渡廊下と連続する中庭・庫裏に接続する庭（サービスヤード）をそれぞれ仕切る4つの塀（空間を仕切る塀）により囲まれ、その空間構成を特徴づけられて、塀で空間を仕切っていくことで前庭がかたちづくられている。その塀が建築内部の壁や建具へと連続していくことで、建築の内部と外部の庭がひとまとまりの空間となり、建築と庭でつくられる配置の基本要素となる。また、空間を仕切る塀により特徴づけられた玄関の空間と庫裏の空間の相互関係によって前庭がかたちづくられている。

(2) 本坊・塔頭は、囲われた庭である前庭、四周に広がる庭を含む客殿、機能的な庭と共にある庫裏、建築と庭の間を縫う広縁・渡廊下、それらを囲む屋外空間（樹林、墓、菜園）と塀からなり、その要素は「客殿」「庫裏」「中庭」「書院」「前庭」「墓地・菜園・樹林」の6つである。それらは、①中庭を中心に各構成要素が配されている。②外側にある墓地・菜園・樹林により囲われる。③塀、壁、建具、生垣による「仕切り」によって、建築と庭によるまとまりのある構成要素がかたちづくられている。④各要素がトポロジカル配置構成となっている。の4点の特徴がある。

(3) 敷地の配置構成は、そのトポロジカルな構成により、外的要因と内的要因の二つの要因を、上記(1)(2)で述べた庭によって空間的に関連づけ、取りまとめている。

以上により、本研究は建築的に限定されたまとまりのある外部空間の構成に対する意匠的研究として、現代建築の設計への応用も可能な知見であると考えられる。

謝辞

大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭の方々には、本研究の調査にご協力頂きました。澤良雄氏（アトリエサウ主宰）から快く西澤文隆氏の実測図を閲覧及び複写のご許可を頂きました。本稿の執筆にあたり重村力教授（神奈川大学）、山崎寿一准教授（神戸大学）には、貴重なお指導・ご助言を頂きました。

ここに記して深く謝意を表します。

注

注1) リンチについては参考文献5)、陣内については参考文献6)を引用参照している。

注2) 日本建築史では川上貢の研究(参考文献7)、日本庭園史では重森三玲の研究(参考文献16))等が著名である。

注3) 参考文献11)～15)。

注4) 参考文献7)13)による。

注5) 川上貢(参考文献8))によると、「塔頭は本来高僧の塔所(墓所)を意味し、高僧の遺体または遺骨を埋葬した塔を中心に、門弟子によって生存時と同様に朝夕の供膳・諷経を行う施設すなわち享堂または昭堂を塔前に設け、守塔者のための居所が付属していた。」が、「門派の成立とその発展によって門派の私的所有物に化し、(中略)門派の拠点として門弟子の育成の場になり、そして門徒内の師弟関係を通じて相承されるものになった。」とあり、高僧やその門弟子達の居住空間としての性格も強くあるのである。

注6) 参考文献7)～11)、13)による。

注7) 三玄院、龍翔寺は、客殿が東面しているため、90度時計回りに回転した配置で扱う。

注8) 計測方法は、1/2500白地図をCADソフト上でトレースし、その敷地の形状のCADソフト上での面積計測、距離計測の値による。表門のある敷地境界を基準に、敷地の東西方向の最大距離をLew(東西方向の敷地幅、横軸)、同じく南北方向をLsn(南北方向の敷地幅、縦軸)とし、その値により散布図を作成した。

注9) 用いた実測図は表5参照。

注10) 大徳寺本坊、真珠庵、大仙院、霊雲院、孤蓬庵については西沢文隆の実測図(参考文献11)14)15))を、龍源院については、重森三玲の実測図(参考文献17))を用いた。

参考文献

1) 今和次郎:日本の民家、岩波書店、pp.90～109、1989(初出「日本の民家」鈴木書店1922年)

- 2) 重村力:建築のデザインと都市環境の回復、「日本建築学会叢書1 都市建築の発展と制御シリーズI 都市建築のビジョン」、日本建築学会、pp.180～202、2006
- 3) 重村力:都市建築のコンテキストとプロトコルについて、「安全と共生の都市空間セミナー実施報告No.5 2006年前期」、神戸大学COE「安全と共生のための都市空間デザイン戦略」、pp.383～431、2006
- 4) 山田圭二郎:間と景観、技法堂出版、2008
- 5) ケヴィン・リンチ:[新版]敷地計画の技法、鹿島出版会、p.5、1988
- 6) 陣内秀信:東京の空間人類学、筑摩書房、1992
- 7) 川上貢:禅院の建築、河原書店、1968
- 8) 川上貢:大徳寺の建築、玉村竹二編「秘宝11大徳寺」、pp.172～181、講談社、1968
- 9) 川上貢:妙心寺の寺域景観と建築、宮次男編「日本古美術全集24妙心寺」、pp.90～97、集英社、1982
- 10) 竹貫元勝:諸堂伽藍と山内頭塔及び龍安寺、荻須純道編「妙心寺」、pp.147～239、東洋文化社、1977
- 11) 西沢文隆:西沢文隆小論集2-4庭園論I人と庭と建築の間、II日本文化の中で、III続・日本文化の中で、相模書房、1975-76
- 12) 西沢文隆:西沢文隆の仕事(一)透ける、鹿島出版会、1988
- 13) 西澤文隆:伝統の合理主義、丸善、pp.6～35、1981
- 14) 西沢文隆:建築と庭 西澤文隆「実測図」集、西澤文隆「実測図」集刊行委員会、建築資料研究社、1997
- 15) 西澤文隆:西沢文隆実測図集刊行会:日本の建築と庭—西沢文隆実測図集、中央公論美術出版、2006
- 16) 重森三玲:日本庭園史体系全35巻、社会思想社、1971～76
- 17) 重森三玲、完途:実測図日本の名園、誠文堂新光社、1971-1976
- 18) 都市デザイン研究体:日本の都市空間、彰国社、1968
- 19) 川崎清、小林正美、大森正夫:仕組まれた意匠、鹿島出版会、1991

(2009年9月29日原稿受理、2010年4月20日採用決定)